

殿坂口遺跡発掘調査 現地説明会資料



～殿坂口遺跡について～

高原川と支流・和佐保川の合流付近の河岸段丘上、国道471号から約30m登った地点に位置しています。伝承や地表面観察等から寺院跡と認識されています（飛騨市教育委員会 2020）。

また、和佐保川を挟んだ対岸に江馬氏の本城である高原諏訪城跡が位置するという立地的条件から、室町～戦国時代に神岡の地を治めた江馬氏に関連する遺跡である可能性も想定されています。

過去の踏査では表採遺物が見つかっており、縄文土器、須恵器椀、青磁碗、瀬戸美濃焼、珠洲焼が確認できることから、縄文時代、古代、中世の散布地としても報告されています（飛騨市教育委員会 2019）。

～調査の期間～

11月11日（月）～26日（火）

～調査地～

殿坂口遺跡（飛騨市神岡町殿）



殿坂口遺跡までのルート（県域総合型GISぎふより）

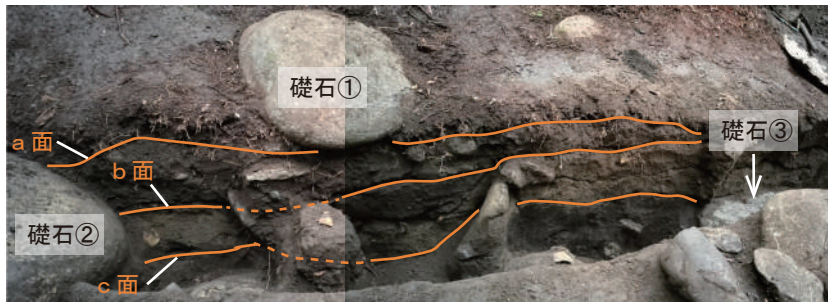
a～cで示した3面の遺構面を確認しました。a面では、礎石①と集石遺構を確認しました。出土した土師器皿の年代から、江馬氏下館の最盛期の頃（15世紀末～16世紀初め）の遺構であると考えられます。礎石①に対応する川原石が北に2石、南に1石、1.2m間隔で見られ、合わせて4石が並んでいることを確認しました。b面では、礎石②が見つかりました。礎石②は火を受けた痕跡が認められます。c面では、礎石③が見つかりました。遺物が出土しなかったため、b面・c面が利用されていた時期は判断できませんが、3時期にわたって建物が建て替えられた可能性があります。



出土した土師器皿
(北より撮影)

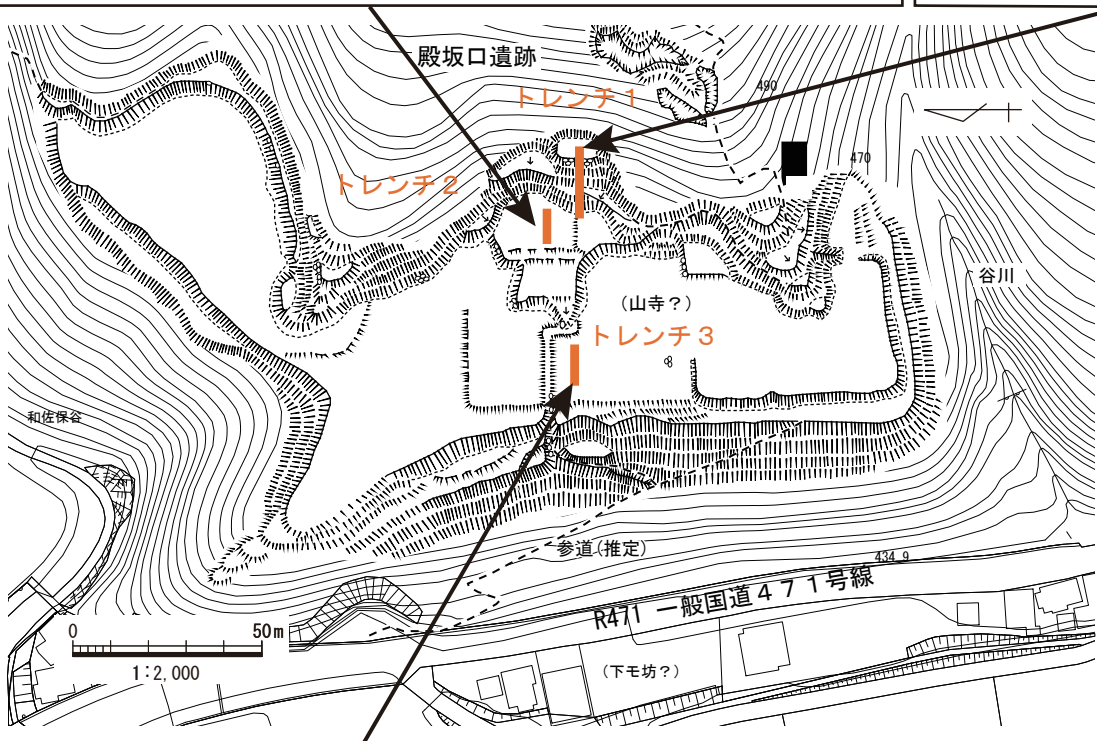


表土をめくり露出した石垣 (西より撮影)

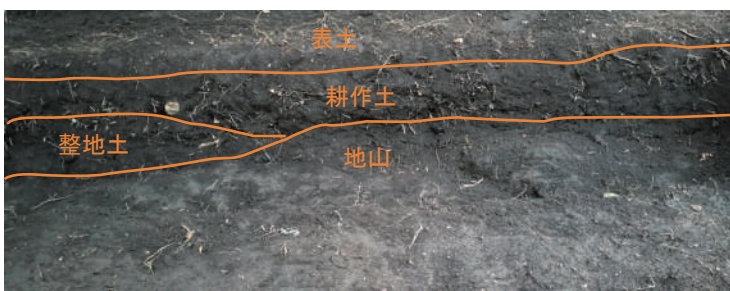


トレンチ2で確認した3つの礎石 (北壁・南より撮影)

最高所の平坦地の西側の斜面に石垣を確認しました。石材には川原石が用いられています。また、斜面の厚い堆積層の下から石を敷いたような集石を確認しました。これらは、トレンチ西端から中央部付近まで広がります。さらに、同様の石の集まりをトレンチ2の東側でも確認しました。これらは地山の河床礫の可能性がありますが、現時点では人為的と判断できないものの、石敷き遺構である可能性も残されています。その説明は今後の調査に期待されます。



堆積層の下の集石
(西より撮影)



トレンチ3南壁 (北より撮影)

トレンチ3を設定した平坦面は後世に畑として利用されていました。表土の下にはその際の耕作土が見られ、瀬戸美濃焼1点が出土しました。トレンチ東側ではその下から整地土を確認しました。このことから、この平坦地でも何らかの活動が行われていたことが明らかになりました。

～調査成果のポイント～

- ・ 中世の土師器皿を伴う礎石建物を確認したことから、江馬氏と同時期の遺跡の存在を考古学的に証明できました。
- ・ 最高所の平坦地の斜面で石垣を確認しました。
- ・ トレンチ2では3時期の礎石を確認し、建て替えを行いながら利用されていた可能性が明らかになりました。
- ・ トレンチ2を設定した平坦地の堆積層の下から、石が敷かれたような広がりを見つけました。

<参考文献>

飛騨市教育委員会2019『飛騨市遺跡詳細分布調査報告』
飛騨市教育委員会2020『江馬氏城館跡7・江馬氏殿遺跡』